

中学生におけるコミュニケーションツール利用とこころの健康に関する研究

著者	石飛 マリコ, 山田 小織, 古賀 佳代子, 丸山 佳代, 今村 寿子, 松浦 賢長
著者別名	ISHITOBI Mariko, YAMADA Saori, KOGA Kayoko, MARUYAMA Kayo, IMAMURA Hisako, MATSUURA Kencho
雑誌名	思春期学
巻	30
号	1
ページ	109-110
発行年	2012-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1127/00000802/

D1-2 中学生におけるコミュニケーションツール利用とこころの健康に関する研究

1) 福岡大学医学部看護学科, 2) 久留米市立良山中学校, 3) 久留米市立櫛原中学校, 4) 福岡県立大学看護学部

石飛マリコ¹⁾, 山田小織¹⁾, 古賀佳代子¹⁾, 丸山佳代²⁾, 今村寿子³⁾, 松浦賢長⁴⁾

【目的】中学生におけるコミュニケーションツール利用状況と抑うつ, 自己効力感および社会的スキルの実態を調査することを目的とした。

【研究方法】福岡県内2中学校の3年生296人を対象に質問紙調査を行った。質問項目は, 基本的属性と携帯電話の使用についての6項目, 普段の生活の様子についての6項目で, セルフ・エフィカシー尺度(嶋田, 1998)と抑うつ尺度(村田, 1994)を用いた。統計ソフトSPSS Ver.19を使用して, 携帯電話の使用状況と社会的スキルや自己効力感, 抑うつの関連を分析した。統計的有意水準は5%未満とした。倫理的配慮としてA大学倫理委員会の承認を得た。

【結果】質問紙回収率は約94%であった。対象者の背景は男性121人, 女性130人で, 携帯を所持しているものは約55.5%であった。抑うつ群は全体で28.7%であり, 男性の抑うつ群は18.2%, 女性の抑うつ群は38.5%であった。男女の抑うつの有無には有意差が見られた($p = 0.002$)。携帯電話所持群の抑うつあり群は31.9%で, 携帯電話所

持と抑うつに関連は認められなかった。自己効力感の平均値は37.67で低群は46.9%，社会的スキルの平均値は30.70で低群は47.6%であった。携帯電話所持や一日のメールの回数と社会的スキル、セルフ・エフィカシー、抑うつに関連は見られなかった。自己効力感と抑うつに関連において、負の相関が見られた。相関係数は男性では $r = -0.436$ (1%水準)、女性では $r = -0.499$ (1%水準)であった。携帯でのメールの目的で「友人と本音でやり取りする」「とても嬉しい時や楽しい時にやり取りする」「とても悲しい時や落ち込んでいる時にやり取りする」と回答した生徒は抑うつが認められ、有意差が見られた。

【考察】先行研究(傳田, 2004)と本調査での抑うつ群を比較すると、本調査の方が高かった。要因として地域差や生活環境の変化が考えられるが今後検証していく必要がある。男女の抑うつについては、女性の方が有意に高く、先行研究と同様であった。また、本調査でも自己効力感と抑うつには負の相関が見られ、生徒に対して自己効力感を高めるかかわりが必要であることが示唆された。また、携帯電話のメール目的で、有意差が認められた項目について、要因を確認し支援に役立てる必要があると考える。